

スペイン・バルセロナ留学体験記

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程2年 池田 朋洋

IKEDA Tomohiro

0. はじめに：本レポートの位置づけ

私は4年前に学部交換留学生として上智大学からスペインのバルセロナ自治大学に留学し、現在は東京大学大学院で文化人類学を学んでいます。一口に留学といっても動機や目的から利用する制度まで様々だと思いますが、本レポートはスペインへの学部交換留学について、当時の私の経験を現在の立ち位置からふりかえったものです。レポートの後半ではこの留学をEUという多言語社会の中で捉えてみることで、非英語圏留学としてのスペイン留学の魅力について考える試みとしました。

1. スペイン留学の動機

留学に至るまでの動機や道のりというのは人によってずいぶん異なると思いますが、私の場合何も高尚な目的があって留学を決断したわけではありませんでした。もとを辿れば高校時代から国際交流や翻訳に興味があり、英語圏に関しては海外研修などですでに経験があったため、英語以外の選択肢として進学に際してスペイン語学科を選択したこと。そのスペイン語学科で勉強する中で、スペインの文化を肌で感じたいと思ったこと。大きく言ってこの2点が主な決定因で、語学力の向上や興味のある分野が学べることなどがこれに付随したに過ぎませんでした。ただ、高校時代の海外研修の経験はまず異国に行ってみることで得られるものが何かしらあるということを知ってくれたものとして、留学につながる原体験の一つだったかもしれません。

2. はじめての留学とスペインという国

上述のような成り行きで留学を目指した私にとって、交換留学という制度は非常にありがたいものでした。何しろ留学先の選定や留学手続きといった面ではある程度事前に絞り込まれるため悩む必要はありません。ですが、例えばビザの発行や滞在先の予約など、それから先の下準備に際してはやはり苦労し、早速日本とスペインの違いを感じることになりました。ビザの発行に関しては申請してから手



バルセロナ全景

元に届くまで3ヶ月。とにかく時間がかかります。また、滞在先の寮の入寮手続きの際にはややこしいオンラインでの登録を終え敷金を払ったにもかかわらず、現地に着いたら「そんな名前は見当たらない」などと言われる始末。まさにカルチャー・ショックの連続でした。しかし、寮の手続きにしても間違いがわかってからの対応の臨機応変さなどは見事で、うまくいく部分といかない部分が違うだけなのだとは割り切ったからはずいぶん楽になりました。実際、こういった手続きを自分でやるというだけでもスペインという国の制度やその際の現地の人々の動きを知ることが出来るため、今では非常に重要な経験だったと思います。

3. 現地での生活

現地での生活は慣れればなんということはありません。滞在先は大学に付設された寮で、2,000人以上は暮らせるような学生村といったところでした。寮内にはコンビニもレストランもあり、困ることはまずありません。物価も安いので自炊を心掛ければ日本よりよほど安く生活出来、家賃を含めて月に400ユーロもあれば十分でした。部屋は2LDKを4人で共有するタイプで、留学生は必ずスペイン人と同室になるように定められているため、日常生活の中でスペイン語にもどんどん慣れていけました。その他、大学付属の診療所では無料で診察してもらえたりと、総じてサポートの部分は手厚かったです。



バルセロナ自治大学キャンパス

授業については、交換留学生は制度上通訳翻訳学科に所属することになりますが、実際はどの学部のどんな科目でも履修することが可能なため、非常に自由度が高く楽しいものでした。ただしバルセロナのあるカタルーニャ州ではカタルーニャ語が公用語として大きな位置を占めるため、私の留学先のバルセロナ自治大学でも通訳翻訳学科以外ではほとんどの授業がカタルーニャ語で行われていました。私の場合、興味があるスペイン音楽関連の授業を

受講するにはこの課題をクリアせねばならず、音楽学科の授業などで当初これに大変苦労しました。最初は聞き取ることすら難しかったですが、それでも勉強と慣れ、そしてなにより授業の予習をしっかりとすることが理解の助けとなりました。このカタルーニャ語には苦労もさせられた反面、留学終盤に行ったフィールド・ワークの際にはスペイン語以外のもう一つのツールとして随分と役に立ってくれるなど、プラスの要素が大きかったのもまた事実です。

他方、同居人や近所の学生、あるいは同じ授業を受けている仲間同士のつながりも非常に強く、週末を一緒に過ごしたり休暇には共に旅行したりと、留学後もつづく関係が出来たことも非常にうれしかったです。終電で街に繰り出し始発で帰るような現地の学生のタフさには驚くばかりでしたが、勉強も遊びも一緒に出来たことは本当に

良かったと思います。

4. 留学といま

留学から帰ってきて早3年が経ちますが、その後の私の歩みを振り返ると、やはり留学中に経験したことの影響力の大きさを感じずにはられません。留学直後は就職と進学との間で悩む時期もありました。そもそも欧州への留学は時期として秋に出発し夏に帰ってくるため、論文を書くにしろ就職活動をするにしろ時期的に難しいという難点もあります。私の場合1年留年しながら大学院入試に向けた準備をし卒業論文を書く、という選択をしました。そしてその決断に至る最も大きな要因となったのは留学中に行ったフィールド・ワークの経験でした。

先にも述べたとおり、私はスペイン音楽への興味から音楽学科の講義を多く受講しましたが、その際に受けた民族音楽学についての講義を通してフィールド・ワークの方法論や文化人類学という学問領域と出会いました。そして留学終盤、カタルーニャの民族舞踊を踊る人々について3ヶ月ほどに渡ってのフィールド・ワークを行ったこと、また帰国後その調査で得たデータをもとに卒業論文を書き上げることになったことが、最終的に大学院で文化人類学を学ぶという、現在の私の立ち位置へとつながることになります。

こうしていざ振り返ってみると、当初は想定していなかった多くの経験ときっかけがあったのだと実感させられます。その上大学院で修士論文を執筆している今の私には博士課程での生活地・調査地としてのスペインやカタルーニャが浮かび上がってきており、当時経験した生活や出会った人々が今なおきっかけを与え続けてくれています。



民族舞踊「サルダーナ」を踊る人びと（フィールド・ワークに際して）

5. 補論1：EUの中のスペイン

上述のような経験から考えると、私の留学体験は制度的にも社会や文化としてもスペインという具体的な国やカタルーニャという州との関連で捉えるべきものの割合が大きいかと思えます。しかし、スペイン国外へ足を運ぶときはもちろん、スペイン国内での留學生活においてもEUという国家を超えた枠組みを意識させられることが多かったのも印象的でした。

ご存知のようにEU各国は入国審査の簡略化など、EU域内の行き来が容易であるというのが一つの特徴ですが、それ以外にも大学制度や留學制度の面においての交流が盛んなのも特徴です。例えば私が留學したバルセロナ自治大学には「エラスムス」という欧州の交換留學制度を通じてかなりの人数の留學生がEU各国からやって来ています。言語的な面からもフランスやイタリアといった隣国からの留學生が多いのですが、こういったEU各国の留學生との交流を通してスペイン以外の国へ出かけたり、またスペイン語以外の言語に触れる機会があるというのは非常に良い経験でした。例えば休暇にイタリア人の友人の実家を訪れた際には、入国審査などの面倒がないのはもちろんのこと、航空券も格安チケットで10ユーロ程度と本当に気が向けば行けるような身近さを感じました。特にフランスやイタリアといった隣国はバルセロナからはアクセスが良く、フィールド・ワークでも足を伸ばせる地の利を感じました。

6. 補論2：多言語社会としてのスペインとEU

このような状況の中で個人的に最も刺激を受けたのはEU圏にいて経験できる多言語状況でした。普通に考えれば出入りは簡単に出来ても言語は当然苦勞するところです。しかしスペインに留學した場合、特にイタリアやフランスなどラテン語圏の話者との交流に際しては言語系統が近いため、状況次第でコミュニケーションをとることも十分可能です。私の場合、カタルーニャ語に触れていたことがフランス語やイタリア語への理解や親近感の助けとなりました。フィールド・ワークで南フランスの小村に足を運んだ際には思った以上に言葉が通じ、貴重な調査が実現できました。英語が使える人が一般に少ないということも手伝って、研究と私生活とにかかわらず、多言語を駆使してなんとかコミュニケーションを図るという場面は非常に多かったです。

これに関しては日本人としての自分自身や、それまでの英語圏での経験と比較してみると、そもそも多言語状況が一般的であるということ自体に大きなメリットがあるように感じられます。EU圏の国々については、一つの国といっても地方ごとに言語が違うということは決して珍しいことではありません。多言語状況に対して積極的に関わられる、あるいは少くとも言葉がわからなくてもとりあえず近い言葉でしゃべってみるという経験が出来るのは、英語という共通言語の比重が大きい英語圏留學とは違ったEU圏留學のメリットでしょう。これは日本語という非常に孤立性の高い母語を持つ日本人にとってもまた貴重な体験だと思います。国家や言語をまたぐ形での会話に自然に挑戦できるのはEU圏の大きな魅力といつてよいでしょう。

7. どこに行くのであれ

留学というとはやはり学ぶのは特定の言語や学問であるというのがまず第一点でしょう。今回スペインへの留学をEU圏留学として捉えてみたこと自体、やはり言語という要素が留学で大きな位置を占めていることを前提としています。しかし実際に現地で学べることというのは言語や学問という枠を当然大きく超えてくるものでもあります。それは、例えば見知らぬ土地で如何に生きるかという生活スキルであったり、まったく文化的背景の異なる同居人と如何に過ごすかという他者理解の仕方であったりします。こういう生きること全般に関しての経験を母国以外の土地で積めるというのは、どこに行くのであれ留学することで得られる一番の財産だと私は思います。例えば今の私が博士課程以降の調査地としてスペインという国を何の問題もなくイメージできるのは、言語や学問以上にそこに行ったことがあるという経験そのもの、あるいはその際培ったそこで生きていけるという自信があるからに他ならないでしょう。その経験は日々を過ごすうちに新たに再発掘されて、当時見えていたもの以上のものを今の研究生活や日常生活に与えてくれます。留学中に何を思い何を感じずるかも大事かもしれませんが、留学後も日に日に将来のイメージの幅が広がっていくというのも、留学が与えてくれる喜びの一つかもしれません。